

年末年始の伝統行事

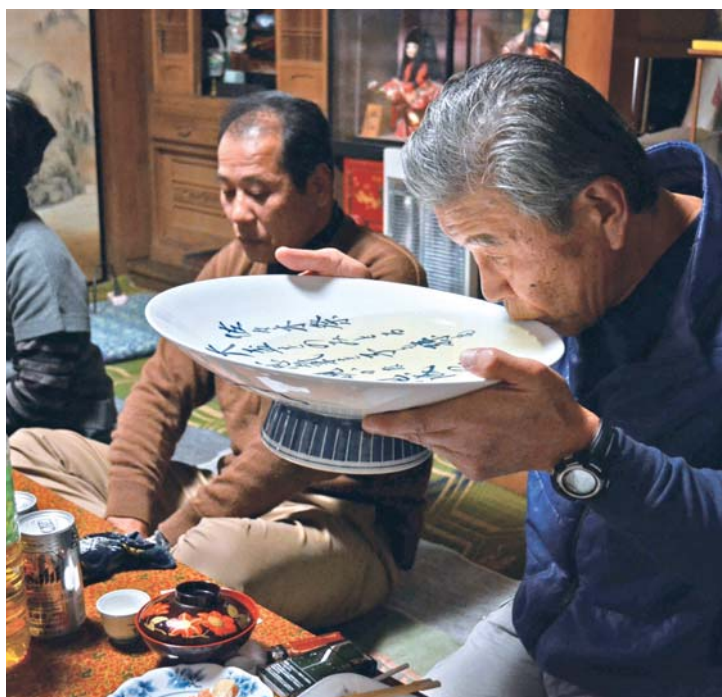


【木太刀の舞】

御厨町寺ノ尾地区にある八幡神社（森川典幸宮司）で12月15日、木太刀の舞が披露されました。

この舞は、江戸時代から続く伝統芸能で、同神社の例大祭に奉納される神楽の一つ。木製の太刀を担ぎながら鈴を片手に舞う神楽で、太刀が大きいほど翌年は豊作になると言い伝えられています。

氏子の久保照夫^{てるお}さんが、同地区内の山から切り出したイタビの木を使い、約3時間かけて長さ約1.4^m、重さ約20^{kg}の木太刀を作製。今福神社の早田伸次^{ねぎ}禰宜が笛と太鼓に合わせて舞を奉納すると、神社に集まった約20人の地区住民は、地区の安全と五穀豊穰を祈願しました。



【佐々木様】

12月24日、志佐町池成地区に300年以上前から伝わっている佐々木祭が行われました。

池成地区には、平戸藩士でこの地域を治めていた「佐々木様」が、参勤交代で留守中に妻の不義のうわさを耳にし、大酒を飲むようになり亡くなったという故事が残っています。

今では、佐々木祭として、佐々木様に仕えた家臣の子孫にあたる同地区の5世帯が、命日といわれるこの日に毎年持ち回りで開催しています。

この日は、地区内にある佐々木様の墓参りをした後、当番に当たる吉山康幸さん宅に集まり、直径40^{cm}、重さ3.3^{kg}の大杯で酒1升を回し飲みしながら、霊を慰め親睦を深めました。



【もぐら打ち】

家内安全や無病息災などを祈願するもぐら打ちが1月初旬に市内各地で行われました。

星鹿地区では1月6日に小中学生15人が集まり、地区内の約120戸を2班に分けて回りました。

子どもたちは、新わらで作った長さ約80センチのもぐら打ち棒で、玄関先の床をたたきながら、「祝いましょう 祝いましょう 祝いのもちをくれたなら 末も繁盛で世もよかる…」と大きな声で唱え、地区の安全を祈願しました。



【鬼火たき】

正月恒例行事の鬼火たきが1月7日、市内各地で行われました。鬼火たきは、しめ縄や門松に火を放ち1年間の無病息災や家内安全などを祈願するものです。

調川町松山田地区では、久保川志丸^{しまる}さんが新わら約300束、竹約150本を使い、高さ約6.5メートル、幅5メートルの四角すいの形をしたジャンボ鬼小屋を、昨年11月末から3日かけて作りました。

年末年始には鬼小屋に家族や友人が集まり親睦の場にもなっています。

1月7日は地域住民など約30人が集まり、持ち寄った門松などを鬼小屋の中に入れ、久保川さんが火を付けると鬼小屋は勢いよく燃え上がりました。



【百手講】

志佐町庄野地区の王嶋神社で1月8日、百手講が行われました。

この行事は、的に当たった矢の数で今年の豊凶を占うもので、市の無形民俗文化財にも指定されています。

今年の射手は、本山孝太郎さんと猪口晃さん。この日はあいにくの雨模様となりましたが、地区住民が見守る中、烏帽子と狩衣姿の2人が8メートル離れた場所から直径約50センチの的にめがけて50本の矢を交互に放つと、途中連続して的に射抜くなど、見事に12本の矢が命中しました。

中川明宏宮司は「矢が連続して当たることは大変珍しい。12本の矢が命中したので、今年の豊作は間違いなし」と話していました。



【大般若】

大般若の経典が入った箱の下をくぐり、1年間の無病息災を祈願する大般若が志佐町の8地区と福島町の5地区で行われました。この行事は、江戸時代に疫病が流行したとき、大般若経を祈とうして回ると疫病が治まったことが始まりとされています。

志佐町里地区では1月11日に、還暦と厄入りを迎えた住民と地区の役員が、重さ約10キログラムの経典が入った箱を交代で担ぎ、「だいはんにゃー」と掛け声を掛けながら地区内の約200戸を回りました。立ち寄った家々では、担ぎ手にお神酒などを準備して出迎え、経箱の下をくぐり1年間の無病息災を願いました。